

## 日英比較表現論 (2)

南 満 幸

### 目 次

はじめに

- ① 日本語の「～している」形 vs. 英語の現在進行形
- ② 日本語の「～している」形は、英語ではどのように表わされるか
- ③ 英語の現在進行形は、日本語ではどのように表わされるか
- ④ 結 び

Notes

Bibliography

### はじめに

前回に引き続き、日本語の表現と英語の表現との比較から両言語の理解並びに教育の向上に幾分なりとも資することが出来れば、という願いが本稿を書いたきっかけである。

今回は、日本語の「～している」という形と英語の「現在進行形」との関係を詳しく調べてみることにした。

### ① 「～している」形 (日本語) vs. 現在進行形 (英語)

中学生は、英語の授業で「be 動詞の現在形 (am, are, is) の後に現在分詞 (-ing 形) が来る形を『現在進行形』と呼んで、日本語の『(今) ～シテイル』に当たる」というようなことを教わる。次の (1)、(2) のようなペアにおいては、この説明で全く問題はない。

(1) E Taro *is watching* television.

(1) J 太郎はテレビを見ている。

(2) E Hanako *is doing her* math homework.

(2) J 花子は数学の宿題をやっている。

ところが、現在進行形を習った後に、次のような日本文を示して「この文を英訳しなさい」と言うと、かなりの割合で (3) E1, (4) E1 のような誤った答えを書いてしまうのである\*1。

(3) J 私は富岡に住んでいる。

(4) J 父は A 銀行に勤めている。

(3) E1 ? I *am living* in Tomioka.

(4) E1 ? My father *is working* for A Bank.

ちなみに、出題者が期待した「正解」は、もちろん、

(3) E2 I *live* in Tomioka.

(4) E2 My father *works* for A Bank.

という、「単純現在形」を用いた文である。

言うまでもなく、「誤答率」は現在進行形の印象が鮮明であればあるほど（即ち、現在進行形を習ってから経過した日数が少なければ少ないほど）、高くなる傾向がある。これは、中学生の頭の中で、「英語の現在進行形」と「日本語の～シテイル形」とが百パーセントぴったり重なるものと思い込んでしまう過度の一般化 (overgeneralization) が起こったためだと考えられる\*2。

本稿では、英語の現在進行形と、日本語の「～している」形がどの部分で重なり、どの部分でずれるのか考察していくことにしよう。

## 〔2〕 日本語の「～している」形は、英語ではどのように表わされるか？

例文 (1)、(2) から、まず第一に「現在進行形」で表わされることは分かっている。次に、例文 (3)、(4) から、「単純現在形」で表わされることがあることも分かった。では、次の日本文はどのように英訳すればよいであろうか。

(5) J 母はインフルエンザで一週間寝込んでいる。

ここは、「現在進行形」でも「単純現在形」でもなく、第3の形「現在完了形」の出番であろう。例えば、次のように英訳できる。

(5) E My mother *has been laid up* with the flu for a week.

それでは、次の日本語はどうであろうか。

- (6) J こちらの女性は死んでいる。  
 (7) J 窓が開いている。  
 (8) J おや、電気が消えている。

普通の英訳はおそらく次のようになるであろう。

- (6) E The woman over here *is dead*.  
 (7) E The window *is open*.  
 (8) E Oh, the light *is off*.

ここで、読者諸君は一つ疑問を抱かれるかも知れない。「動詞だけを見ると単純現在形だから、(3)、(4)と一緒に一つの範疇に入れてしまえばいいではないか。何故わざわざ別扱いするのか？」という疑問である。もっともな疑問ではあるが、これにはちゃんとした理由がある。(6)～(8) Jの「～している」は、国語学で言うところの「結果の残存」を表わす補助動詞である。

日本語教育学会(編)「日本語教育事典」(大修館書店)の「補助動詞類各説」中の「～ている」の項の説明を引用すると、

(前略)

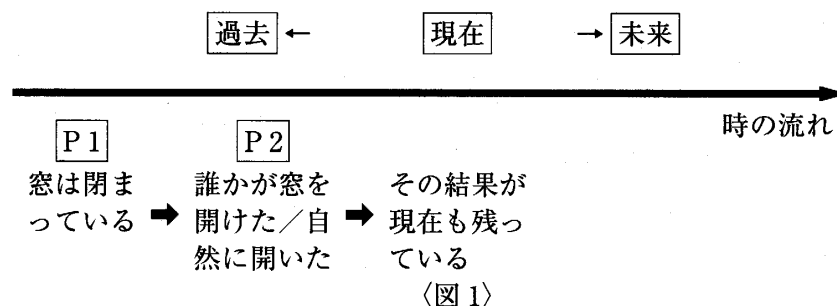
② 戸が開いている。

動作・作用の結果の状態を表わすもので、多くの場合、英語の be + p. p. (過去分詞)に当たる。主語がモノである場合が多いが、人・動物の場合もある。(「あの人は結婚している。この虫は死んでいる。」) 前の動詞は結果動詞(主体にその変化の結果を残すような意味を表わす動詞)である。

(後略)

(366 ページ。 下線は原著者、傍点は筆者。)

特に注目すべきは、傍点を施した部分である。例文 (7) J に即して説明すると、「過去のある時点 (P1) では閉まっていた窓が、別の過去の時点 (P2。 P1 と現時点の間のどこか) に何者かによって開けられた、あるいは自然に開いた。その『開く』という動作・作用の結果が現在も残っている」ということになる。これを、「数直線」ならぬ「時直線」の上に表わすと次のようになる。



例文 (6)～(8) J について見ると、引用文中の「結果動詞」は、「ある状態から別の状態への移行を表わす動詞」と言い換えることができる。 即ち、

(6) J における「死ぬ」：alive の状態→dead の状態への移行

(7) J における「開く」：closed の状態→open の状態への移行

(8) J における「消える」：on の状態→off の状態への移行

という具合である。

この「be + 形容詞」型の表現は喜怒哀楽に代表される精神状態を表わす表現で頻繁に用いられる。(この場合、「形容詞」はいわゆる「分詞形容詞」であることが多い。) 例えば、「気が滅入っている」、「意気消沈している」、「狼狽している」は、各々 “be depressed,” “be dejected,” “be upset” と、いずれも「be + (分詞)形容詞」で表わすことができる。

以上で終わりではない。 日本語の「～している」には、更に次のような用法もある。

(9) J トム・ハンクスはアカデミー賞を2回獲っている。

(10) J 日本だけでも、毎年交通事故で千人以上の人が死んでいる。

(9) J のような用法は、前掲書では「経験・記録」に、(10) J は「繰り返しの動作」として分類されている。 英訳するとしたら、(9) は伝統的な分類に従えば「現在完了・経験<sup>\*3</sup>」、(10) は「単純現在形」の出番となろう。

以上の結果をまとめると、次のようになる。

日本語	英語
～している	① 単純現在形
	② be + 形容詞
	③ <b>現在進行形</b>
	④ 現在完了形 〈継続〉
	⑤ 現在完了形 〈経験〉
	〈表 1〉

日本語の「～している」は、上記①～⑤の5つに対応することが分かった。但し、あくまで「動詞部分の形態」にこだわるならば、①と②、④と⑤をそれぞれ一まとめにして3つ、ということになる。

### ③ 英語の現在進行形は、日本語ではどのように表わされるか？

ここでは、前項とは逆に、現在進行形を含んだ英文を和訳した時に、現在進行形はどのような日本語になって現われるかを見ていくことにしよう。

まず手始めに、英語の native speaker は、現在進行形 (present progressive) の意味をどのように捉えているのかを知るために、Quirk *et al* (1972) における説明を見てみよう。

#### Progressive

##### 3.39

Progressive aspect indicates temporariness — an action in progress instead of the occurrence of an action or the existence of a state:

simple present: Joan *sings* well.

present progressive: Joan *is singing* well.

These two sentences have the same tense but different aspect. Notice the meaning difference between them: *Joan sings well* refers to Joan's competence as a singer, that she has a good voice; *Joan is singing well* refers to her performance, that she is singing well on a particular occasion. The simple/progressive aspectual contrast also applies in the past tense:

simple past: Joan *sang* well.

past progressive: Joan *was singing* well.

In addition to process and continuation, there are a number of other concomitant meanings or overtones that go with the progressive aspect, such as limited duration, incompleteness, simultaneity, vividness of description, emotional colouring, and emphasis. Compare the following contrastive pairs of sentences:

[	John <i>plays</i> the banjo.	INDEFINITE TIME
	John <i>is playing</i> the banjo.	TEMPORARINESS: 'John's activity at this particular moment is playing the banjo.'
[	The professor <i>types</i> his own letters (and always has).	HABITUAL ACTIVITY of the professor
	The professor <i>is typing</i> his own letters (these days).	LIMITED DURATION: the progressive suggests that the professor's activity is of limited duration.
[	John always <i>comes</i> late.	CHARACTERISTIC ACTIVITY, allows an objective tone.
	John's always <i>coming</i> late.	CHARACTERISTIC ACTIVITY, necessarily occurring with adverbs like <i>always</i> and <i>continually</i> . It imparts a subjective, emotionally coloured tone.
[	I <i>read</i> a book that evening.	COMPLETION: the speaker reached the end of the book before the end of the evening.
	I <i>was reading</i> a book that evening.	INCOMPLETION: there is no implication that the reading was completed in the course of the evening.

(92-93 ページ)

第1例は「今～している」、第2例は「(どういう心境の変化か/どういう風の吹き回しか)最近は～している」、第3例は「いつも～ばかりしている」、とそれぞれ微妙にニュアンスは異なるものの、いずれも「～している」と訳すことができる。(第4例は「過去進行形」なので今は考慮の対象とはしない。)

次に、いわゆる「近接未来を表わす現在進行形」を考えてみよう。前掲書の解説は以下の通りである。

## 3.30

## Present progressive

The present progressive refers to a future happening anticipated in the present. Its basic meaning is 'fixed arrangement, plan, or programme':

The orchestra *is playing* Mozart.

Since the progressive is used to denote present as well as future, a time adverbial is often used to clarify in which meaning the verb is being used:

They are *washing* the dishes  $\left[ \begin{array}{c} \text{now} \\ \text{later} \end{array} \right]$

The present progressive is especially frequent with transitional dynamic verbs like *arrive, come, go, land, start, stop*, etc, which refers to a transition between two states or positions:

The plane *is taking off* at 5.20.

The President *is coming* to the UN this week.

(88 ページ)

この現在進行形は、さすがに「～している」と訳すわけにはいかないであろう。主語が人間などで意志が相当強く感じられる場合は「～するつもりである\*4」、意志が若干でも感じられる場合は「～することになっている」、意志がほとんど（あるいは全く）感じられず、淡々と「かくかくしかじかの予定が固まっている」と言っているような場合は「～する予定である」というのが普通の和訳であろう。

このタイプの現在進行形に用いられる動詞は、引用文中にあるように、いわゆる「往来発着の動詞」であることが確かに多いが、それ以外の動詞では不可というわけではない。頻度の差こそあれ、do, dine, lunch, publish, sleep, stay, wear それに引用文中にも登場する play, wash などこの構文に生起することが知られている。（但し、「どの動詞でも可」とまではいかないようである。）

最後に、次の例文を考えてみよう。

(11) E He *is dying*.

(12) E “The plane *is landing*.” (機内アナウンス)

まさか (11) E を「彼は死んでいる」と訳すわけにはいかないであろう。（“He is dead.” と “He is dying.” が同じ意味、というところでもないことになってしまう。） そうかといって、上の第2グループと同じ扱いをすると「?彼は死ぬつもりである/?死ぬ予定である」という、いかにも奇妙な日本語が出来上がってしまう。確かに、「彼が死ぬ」という出来事が近い将来起こりそうだ、という意味では「近接未来」と言えなくもないが、少なくとも、こと訳に関して、上の2つのグループとは別の、第3のグループを設定せざるを得ないであろう。

(12) E についても、これを近接未来と見なして「当機は着陸する予定です」と訳すのも無理がある\*5。一旦飛び立った飛行機がいずれ着陸するのは当たり前（着陸しない唯一の方法は墜落することである!）であるから、機内アナウンスでわざわざそのような分かり切ったこ

とを言うのはいかにも不自然である。

普通の和訳はおそらく次のようになると思われる。

(11) J 彼は死にかけている／

死につつある。

(12) J 「当機は着陸するところです／

着陸しつつあります／

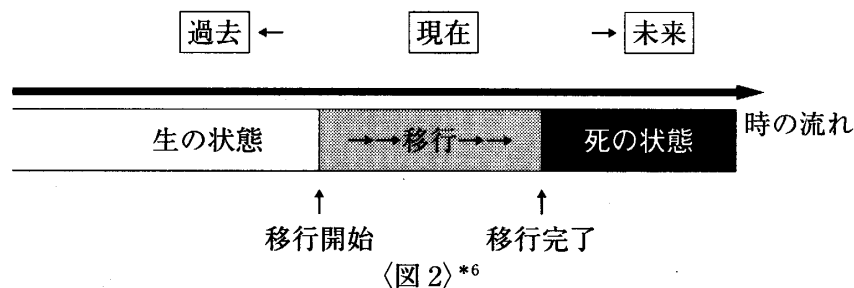
着陸態勢に入っています」

この第3グループの現在進行形に使うことが出来るのは、英語の「結果動詞」(前項参照)である。つまり、

(11) E における die: 「生」の状態→「死」の状態への移行

(12) E における land: 飛行中の状態→(滑走路に)停止した状態への移行

ということである。(11)を前項と同じく時直線上に表わすと、



この〈図2〉を前項の〈図1〉と比較すると次のことが分かる。

- ① 〈図2〉は〈図1〉を右方向(未来の方向)に若干スライドさせたものである。
- ② 但し、〈図1〉には、〈図2〉における「中間段階」(グレーの部分)が存在しない。  
これは「状態の移行」というプロセスが、ある程度の長さを持った「線」ではなく、「点」として(つまり、一瞬で終わるものと)認識されていることを意味するものと思われる。

同じ「結果動詞」であっても、日本語の結果動詞が「～している」という形で生起すると〈図1〉のパターン、英語の結果動詞が現在進行形に現われると〈図2〉のパターン、という具合に微妙な(しかし、重大な)違いが生じるという実に興味深い事実が判明したことになる。

もちろん、医学的には、「移行完了」までは生きているのだから、〈図2〉のグレーの部分の存在には異論もあるかも知れないが、ここではそれは考慮しないことにする。ここで主張し



たいのは、英語の結果動詞が現在進行形で使われると、「現在、ある状態から別の状態への移行の真っ最中である」という意味を表わし、日本語ではそれを「～しかけている／～しつつある／～するところである」という形によって表現するということである。

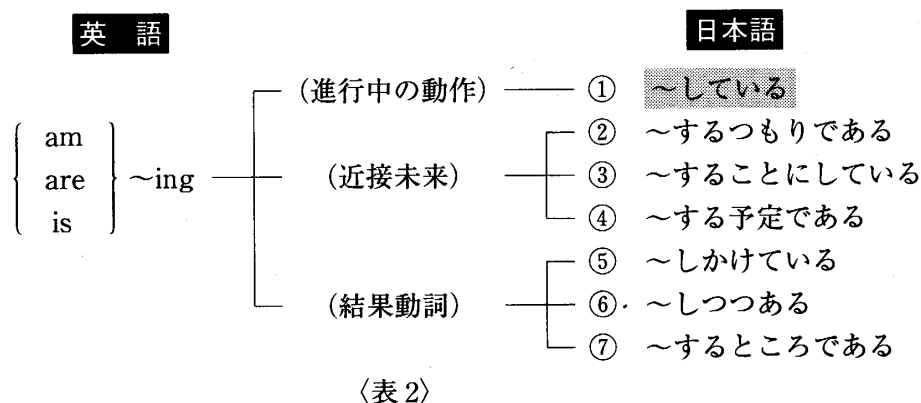
比較的特殊な例として、いわゆる「行為解説の進行形」もあることはあるが、

(13) E I'm not *blaming* you; I'm *saying* all of us are responsible for the accident.

(13) J 君を責めているのではない。 事故の責任は私たち全員にあると言っているのだ。

ニュアンス的にはもちろん、中学生が習う現在進行形とは大分異なるとはいえ、日本語の訳としては、「～している」とごく普通の表現になるので、特に別扱いする必要はないであろう。

以上の結果をまとめると、次のようになる。



実際に登場する頻度が高い/低いという程度の差こそあるものの、英語の現在進行形の和訳としては、少なくとも①～⑦の7種類が可能であることが分かった。

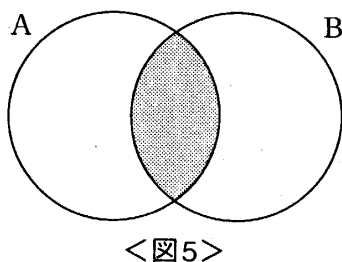
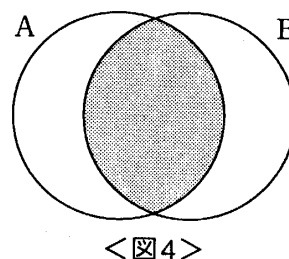
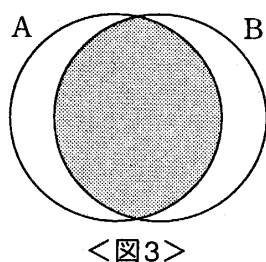
#### ④ 結 び

日本語の「～している」だけを見て反射的に現在進行形を用いて英訳するのが危険なのは、①及び②で分かったが、逆に、現在進行形を含む英文を何も考えずに「～している」と和訳するのも同様に危険であることも③で分かった。

というよりも、〈表 1〉及び〈表 2〉を見ると、①「～している」を現在進行形を用いて英訳してよいケースも、②現在進行形を「～している」と和訳してよいケースも意外に少ない(表のアミカケ部分のみ)、という驚くべき事実が分かる。

もちろん、単純に、①が20%(=5分の1)、②が17%(≒7分の1)となるわけではない。それよりは確率が大幅高くなりはするだろうが、100%には程遠い、と言わざるを得ない。

〈表 1〉と〈表 2〉から、日本語の「～している」形(→A)と英語の現在進行形(→B)の重なり具合を図示すると、



まず、〈図3〉は論外である。〈図4〉でもまだ重なる部分が大きすぎる。結局、〈図5〉あたりが最も実情に近い、ということになるであろう。

\* \* \* \* \*

#### NOTES

\*1 もちろん、(3) E1, (4) E1が英語として認められない (unacceptable) などと主張するつもりは毛頭ない。「一時的、暫定的」という、(少なくとも出題者から見れば)「余計な」ニュアンスが加わってしまうから、「(3) J, (4) J」の英訳としては不適當」というだけのことである。(3) E1には、「今の住居はあくまで仮住まいで、近々別の所に引っ越すつもりである」、(4) E1には、「今のは、腰掛け的な仕事であって、そのうち転職(または脱サラ)する予定である」というようなニュアンスが込められてしまうのである。

この単純現在形と現在進行形の微妙なニュアンスの違いについては、荒木&安井(1992)が実に興味深い例を提示している。

(A) The engine *doesn't smoke* anymore.

(B) The engine *isn't smoking* anymore.

いずれも、エンジンの修理を終えたばかりの修理工の言葉だとする。(A)のように単純現在形を用いると、「煙を出さない」ことは「永続的」である(つまり、完璧な修理が施された)と少なくとも話者である修理工自身は思っているというニュアンスを伝えるが、それに対して(B)のように現在進行形を使った場合は、「煙を出さない」ことはあくまで「一時的・

暫定的」な状態に過ぎず、いつまた煙を出さないとも限らない、という話者の自信の無さが暗に示されている。

\*2 この「過度の一般化」は外国語学習者（特に初級者）が陥りやすい過ちの一つである。

例えば、中学1、2年生あたりだと、英語の go, come が各々日本語の「行く」、「来る」と百パーセント重なるものと勘違いしている者が少なくない。そのために、次の対話を「英訳せよ」と言われた時に、

母 「太郎、夕飯が出来たわよ」

太郎「すぐ行くよ」

次のような過ちをおかしてしまうのである。（もちろん、going は coming の誤り。）

Mother: Taro, dinner is ready.

Taro : \*I'm *going* in a minute.

\*3 同じく伝統的な分類に従えば、(5) E の “has been” は「現在完了・継続」となろう。

\*4 このように和訳すると、will, be going to との区別が難しくなるという新たな問題が生じるが、例えば、大塚（1970）に次のような記述がある以上、

（前略）この近接未来を表わす進行形に be going to よりもさらに強い決心が含まれてくることがある：I'm not *staying* here./I'm not *giving* it back to him, you know.

（後略）

（834 ページ。 下線は筆者。）

このタイプの現在進行形に対応する日本語の一つとして「～するつもりである」を認めないわけにはいかないであろう。尚、will と be going to の比較については、南（1998）、Haegeman（1989）、樋口（1992）などを参照されたい。

\*5 もちろん、次のように未来時を表わす副詞（句）などによる修飾が加われば、

The plane is landing at Heathrow Airport *at 11 o'clock sharp*.

無理なく「近接未来」と解釈できる（というより、そうとしか解釈しようがない）ので、日本語訳は「当機は11時きっかりにヒースロー空港に着陸する予定です」となるだろうが、これ

はこの際全く別の問題である。

\*6 本筋の議論と直接関係はないが、〈図2〉の黒い部分が、日本語では短いのに対して、英語では右方向（未来の方向）に相当長く伸びるような気がする。というのは、

(15) E My father has been dead for ten years.

(15) J1 \*父は十年間死んでいる。

(15) Eが英語としてはごく普通の表現であるのに対して、これを「直訳」した(15) J1は、到底まともな日本語とは認められないからである。普通の日本語訳は(15) J2であろう。

(15) J2 父が死んで十年になる。

どうやら、英語では「黒の状態が十年間続いている」と認識するのに対して、日本語では普通そういう捉え方はしないようである。

この違いは、英米人を始めとする英語の native speaker と日本人の「死生観」の違いと何らかの関係がありそうだが、筆者の専門外なので、これ以上深く立ち入ることはできない。

\* \* \* \* \*

#### BIBLIOGRAPHY

- 荒木 一雄&安井 稔(編)(1992)『現代英文法辞典』(三省堂)
- Haegeman, L. (1989) "*Be going to* and *will*: a pragmatic account." In *Journal of Linguistics* (vol. 25-2). Cambridge University Press.
- 樋口万里子(1992)「*will* and *be going to*: present thought and present reality」(九州工業大学情報工学部紀要、人文・社会科学編 4)
- 南 満幸(1998)「*Will* と *be going to* に関する一考察」(椎内北星学園短期大学 紀要第10号)
- 日本語教育学会(編)(1982)『日本語教育事典』(大修館書店)
- 大塚 高信(編)(1970)『新英文法辞典』(三省堂)
- Quirk, Randolph *et al* (1972) *A Grammar of Contemporary English* (London: Longman)